

「8・24」——池田先生の入信記念日

どうにゆうぶ  
導入部

「8月24日」は、池田先生の入信記念日です。この日は、弟子である私たち一人ひとりが師の戦いに学び、誓いを新たに出發する日です。「8・24」の意義を学んでいきましょう。

1枚目／師弟の運命的な出会い（8枚目の絵の裏に貼る）

戦後間もない昭和22（1947）年、8月24日に、池田先生は創価学会に入会しました。

当時、池田先生は19歳。入会を決意したのは、のちに「人生の師」と仰ぐ戸田先生との出会いがきっかけでした。

2枚目／終戦直後の東京（1枚目の絵の裏に貼る）

師弟が出会った、昭和22年——。

東京は、終戦から2年を経ても、太平洋戦争中の激しい空襲によって一面焼け野原で、復興も始まったばかりでした。また、厳しい食糧難の時期でもあり、多くの人は空腹に耐えつつ日々を過ごしていました。

3枚目／池田名誉会長の苦学の青春（2枚目の絵の裏に貼る）

終戦後の混乱期、池田青年は、印刷工場で働きながら、向学の思いやみがたく夜間の学校に通っていました。

終戦によって、それまでの価値観が崩れ去ったため、池田青年は、人生の正しい哲学を懸命に探し求めて、文学・哲学・歴史や自然科学の本など、あらゆる分野の本を幅広く読みました。

4枚目／弟子の育成に励む戸田先生（3枚目の絵の裏に貼る）

昭和22年当時、戸田先生（当時、理事長）は各地で御書講義などを通し、弟子の育成に励んでいました。

同年8月——。19歳の池田青年のもとに小学校時代の同級生が来訪し、創価学会の座談会に誘いました。

池田青年は、「生命哲学の会合」という言葉に強く心を惹かれました。

5枚目／座談会での出会い（4枚目の絵の裏に貼る）

昭和22年8月14日の夜。会場に入ると、戸田先生が「立正安国論」の講義をしていました。

戸田先生の御書講義のあとは質問会となり、そこで、池田青年は戸田先生に「正しい人生とはどういう人生か？」といったいくつかの質問をしました。

戸田先生は少しの迷いもなく、明快に、しかも誠実な態度で答えました。そのことに、池田青年は鮮烈な印象を受けたのでした。

この座談会から10日後の8月24日、池田青年は創価学会に入会しました。

6枚目／入会の理由（5枚目の絵の裏に貼る）

池田先生が入会を決意した直接の理由は、戸田先生の人柄に触れたことでしたが、同時に、戸田先生が戦時中、日本の軍国主義と闘って2年間の獄中生活に耐え抜いた人物であると知ったことも、大きな要因になりました。池田先生は、この時の心境を次のように語っています。

「私もまた、青年の直感で、『戦争中、平和のため、仏法のために投獄された、この人にはついていけない』と確信したのであった」（『随筆 平和の城』p75）

## 7枚目／入会後の活躍

(6枚目の絵の裏に貼る)

入会后、池田先生は誓願のままに師弟の道を貫き、学会史に残る金字塔を次々と打ち立てていきます。

昭和27年(1952年)1月。蒲田支部の支部幹事に任命された池田先生は、会員一人ひとりに即した励ましで、同年2月、他の支部に倍する201世帯の弘教を達成。昭和31年(1956年)には、関西方面の責任者として指揮を執り、同年5月に大阪支部が1万1111世帯というかつてない弘教を成し遂げるなど、戸田先生のもと、約11年間、薫陶を受け、「不二の弟子」として師匠を支えたのでした。

## 8枚目／「8・24」は弟子の誓いの日

(7枚目の絵の裏に貼る)

昭和22年8月24日の入信から今日まで池田先生は師弟の道に徹し、創価学会は192カ国・地域へ仏法を弘め、世界広布への未曾有の闘いを成し遂げてきたのです。また、池田先生は、世界の識者や国家元首と対話を重ね、世界平和の潮流を築いてきました。

なお、この意義深き8月24日は現在、「広布の黄金柱」である「壮年部の日」ともなっています。

「8・24」とは、師弟の道に徹した師匠の長年の激闘に思いをいたし、弟子として誓いも新たに出發する日なのです。

## 決意など